

ウルフ アウエイクン  
とある激怒狼の覚醒

-レイジウルフ誕生篇-

著者／流遠亜沙

原作／紙白

---

ASSAULT-SYSTEM 文庫

## ■レイジウルフ 機体解説

ヘリック共和国から提供されたコマンドウルフとケーニッヒウルフのデータ、ガイロス帝国のライガーゼロのデータ、そしてジェノクラウエで得られたマグネッサーシステムの実戦データなどを基にしてガイロス帝国が開発した狼型ゾイド。

東方大陸で生息している希少な狼型野生体ゾイドを使用しており、このクラスの機体としては非常に高いコア出力を持っている。

オーガノイドシステムは搭載されていないため操縦性は比較的高いが、本当の意味でのこの機体の性能を引き出すにはゾイドと心を通わす素養と高い身体能力、操縦技術が必要である。

## ■RAGE SYSTEM(レイジシステム)

レイジウルフ最大の特徴である尻尾の冷却装置をフル稼働させ M. C. T に貯蔵してある E N を全面開放しゾイドコアと同調させる事によりゾイドコア出力を3倍程度まで引き上げる事が可能。

それにより通常時とは段違いな戦闘力を発揮する。

ただしシステム使用時間は300秒さらに再使用までには冷却と E N 再充填で400秒掛かりその間本体の E N 出力は80%にまで低下する。

システム稼働状態を通称オフenseモードと呼んでいる。

※ただしこの機能を使用するためにはウルフ自体がパイロットを相棒と初めて使用可能となる。



型式番号：XXXZ01

用途：攻撃、対機甲、対ゾイド

全高：8.2m

全長：17.3m

重量：70.0t

最高速度：380km/h（オフenseモード時 480 km/h）

固定武装：AZ-25mmバルカン×2（頭部側面）、ストライクレーザークロー（爪）、ストライクレーザーファング（牙）

特殊装備：デュアルツインライフル×2（背部／実弾＋ビーム）、Eシールドブレード×2（前腕部側面）

特殊システム：RAGE SYSTEM（レイジシステム）

果たせなかった誓いがあった。  
護れなかった仲間達がいた。

それを責めるものはすでになく。

許されない罪は、一生を懸けて背負い続けるしかない。  
誰からも罰されないというのは、そういう事だ。

残りの生を喪服をまとって生き続ける。

それが唯一の贖罪<sup>しほぐせ</sup>。

しかし、それでも。

生きている以上は何かを成したい。

命を燃やしたい。

だって、生きているのだから。

やがて、雌伏の時は終わりを告げる。

そして、目覚めの時が訪れる。

新たな相棒<sup>パートナー</sup>と共に――

今、眠れる〈激怒狼<sup>ウルフ</sup>〉が覚醒<sup>アウエイクン</sup>する。

# とある激怒狼の覚醒

ウルフ  
アウェイクン

レイジウルフ誕生篇

## プロローグ

ZAC二二〇九年、春。

〔第二次大陸間戦争〕——ヘリック共和国とガイロス帝国による連合軍と、ヴォルフ・ムーロアが率いるネオゼネバス帝国軍との戦争は、なし崩し的に終了した。

そう、戦争は終わったのだ。

しかし、未だ戦火は収まらず、混乱は各地で続いていた。

戦争が終わっても、戦いはなくならない。

ヒトが争う生き物である以上。

その証拠に、戦後の復旧活動を行いつつ、『その先』を見据えたゾイドの建造計画がガイロス帝国軍の一部で進められていた。

開発コードは〈怒れるオオカミ〉。

惑星Ziにおける兵器の進化。それがまた、促進されようとしていた。

とある激怒狼の覚醒  
アウエイクン  
・レイジウルフ誕生篇・

ZAC二一〇九年、夏。

ガイロス帝国軍・第二ゾイド開発局。

その第二試験場<sup>テストサイト</sup>を駆け抜ける、漆黒のゾイドの姿があった。

そのサイズと外観は「コマンドウルフ」に近いオオカミ型だが、「コマンドウルフ」のシンプルなそれとは違い、エッジの利いたパーツで構成されており、より攻撃的なイメージを見る者に与える。あるいは、敵対するゾイド乗りと、そのゾイドに与える心理的影響まで考慮に入れたデザインなのかもしれない。

「レイジウルフ」。

それがこのゾイドの名前だ。

オオカミ型ゾイドの代表格である「コマンドウルフ」や「ケーニツヒウルフ」のデータを参考に、東方大陸に生息している希少なオオカミ型野生体のゾイドコアを使用して開発されたため、このクラスの機体としては非常に高いコア出力を持っている。

その出力を見せつけるように、漆黒の機体が更に加速する。

コクピットの時速計はすでに三五〇キロを超えている。

「まだだ。まだいける——」

「レイジウルフ」のコクピットで、パイロットは自分に言い聞かせるように心中で繰り返した。一見すると少年を思わせる、凛とした容貌<sup>ルックス</sup>の娘だ。

リン・ユズキ。

年齢は二十一歳。髪の色は東方大陸人には珍しい白で、耳が隠れる程度のショートカットにしている。瞳の色は茶色で、強い意志が感じさせる、ひた向きさがある。

普段は東方大陸で、仲間と共に傭兵稼業を営んでいる。

「もっと速く。もっと強く——」

娘——リンは繰り返す。

何度も、何度も。

想いを愛機に伝えるように。

時速計が三八〇キロを示す。「レイジウルフ」の出せる最高速度に達する。

だが——まだ限界ではない。

「——「レイジ・システム」、起動！」

リンが高らかに声を発した。

「レイジウルフ」の名の由来であり、その身に宿した特殊機能——それが「レイジ・システム」である。

機体各部に備えた マグネッサー M コンデンサー C スラスタ T に蓄えられたエネルギーを全面開放し、ゾイドコアの出力を一時的に三倍まで高める。それにより「レイジウルフ」は、通常とは段違いの戦闘能力を発揮する事が可能となる。

しかし——

唐突に「レイジウルフ」の脚が止まった。

同時にコクピット内の電源も落ち、非常灯に切り替わる。正面の表示画面ディスプレイには『SYSTEM FREEZE』の文字だけが浮かんでいる。

「……まただ」

搭乗者を不安にさせる薄暗いコクピットで、リンは呟いた。

「レイジウルフ」のパイロットを任されて、すでに一週間。基本操作は、ほぼ完全に習得済み。なのに、肝心の「レイジ・システム」を起動させようとする、システムがフリーズを起こし、機体が停止してしまう。

「どうして?」

リンは愛機に問いかける。

なぜだ。何がいけない?

しかし、「レイジウルフ」は答えない——応えてくれない。

「……………」

ネガティブな感情が心を支配する。

こういう時に思い起こすのは、決まって七年前の事件だ。

自らが遭遇した「ユガ村の悲劇」。

ただ震えている事しか出来なかった、無力な過去の自分。

「私じゃ……駄目なのかな?」



「またか」

「レイジウルフ」のテストをモニター越しに見つつ、ハン・カミジヨウはため息をつくように言った。

髪の色は黒く、瞳は茶色——東方大陸出身である事を如実に感じさせる容姿の青年だ。

年齢は二十七歳。身長は約百七十センチと平均的で、体格も中肉中背。顔立ちは整っており、充分に二枚目で通せる。

そんな彼が凄腕のゾイド乗りだと言われても、びんと来る者は少ないだろう。

だが実際には名の知れた傭兵である。

愛機であるゾイド〈ジェノクラウエ〉と、〈虐殺爪竜〉の異名を知らないゾイド乗りは、少なくとも傭兵業界にはいないだろう。

(やはり、七年前の事件による心的外傷が原因か)

同じようにモニターを見ていたスタッフの何名かが、頭を抱えているのを横目に、ハン は内心で呟いた。

七年前。

まだハンが駆け出しの傭兵だった頃——〈ジェノクラウエ〉が、まだ〈ジェノザウラー 改〉と暫定的に呼ばれていた頃の話だ。

大統領を失い、また交流の少なかった東方大陸に逃げ延びたヘリック共和国軍の敗残兵 が、東方大陸の集落を襲って略奪をするという行爲に出た。

事態を知った共和国の正規軍は、しかし行動を起こさなかった。いや、疲弊しきった共和国軍には出来なかったのだ。だから、共和国の上層部は、当時友好的だった傭兵部隊を派遣するという決断を下した。その際に呼び集められた傭兵部隊の中にハンはいた。

傭兵部隊は優秀だった。敗残兵とはいえ、元は正規軍を相手に、一騎当千の活躍で圧倒 して見せた。

だが、それがいけなかった。あまりにも一方的な戦局に、敗残兵の一部が自棄を起こし、ユガ村という小さな村に怒りの矛先を向けた。リンの生まれ育った村だ。

かくして〈ユガ村の悲劇〉が起こった。

なおも反抗する敗残兵達の本隊を、ハンが単独で強行突破して駆けつけた時には、村は すすましいい惨状を呈していた。家々は燃え、あちこちに村民の死体が転がっていた。

それでもハンは生存者がいないか、当時の愛機〈ジェノザウラー改〉のセンサーを最大 感度にまで上げて探した。

すると、数十人分の動体反応が感知出来た。

まだ生存者がいた——それが救いであったかのように、ハンはコクピットを飛び降り、 反応のあった広場に駆けつけた。

だが、そこで行われていたのは虐殺だった。逃げ惑う子供達を、ヘリック共和国軍の軍 服を着た男達が、一方的に殺していく。

あつという間の出来事だった。



間に合ってなどいなかった。

すでに手遅れだったのだ。

男達は正気を失っていた。追い詰められて、考える事を放棄した人間の目をしていて。殺される側から、殺す側に自分達を置こうと、彼等なりに必死だったのだろう。

だが、だからといって許される行いではない。

気付けば、ハンはカタナに手をかけ、飛び出していた。まだ助けられる子供もいるかもしれない。そう思った。

結局、助けることが出来たのは一人の少女のみだった。よほどの恐怖を味わったのだろう。黒かった髪の色が抜け落ち、真っ白になるほどの恐怖を。

敗残兵の部隊は鎮圧されたが、そのために一つの村が地図から消えた。

もっと早く降伏勧告を出すべきだった。退路を断って包囲殲滅すべきだった。本当に交渉の余地はなかったのか。

様々な批判が世論を飛び交ったが、ハンにとって、苦い負け戦として心に刻まれたのは事実だ。

あれから七年。また少女だったリンが成長し、今ではチームメイトとして側にいる事に、ハンはまだに不可思議な感情を抱いていた。

(俺は、あいつに恨まれているのかもな)

村を全滅させた責任の一端は傭兵にある——それが一部の口さがない連中の意見だった。確かに一理ある。功を焦った一部の傭兵が、独断専行をしたのは事実であった。そのために戦局は傭兵部隊側に一気に傾き、敗残兵達の一部は冷静さをなくした。

〈ユガ村の悲劇〉の唯一の生き残りであるリンが、そういう考えを持っていたとしても仕方のない事だ。

「……リン、今日はここまでにしよう」

そう思うと、リンに話しかけるのが怖くなる時がある。返ってくるのは拒絶の言葉ではないか、と。

だが、モニター越しの白髪の娘は、『うん、了解』と素直に、しかし気落ちした風に答えた。

「……………」

元気付ける言葉の一つでもかけてやるべきだろうが、上手い言葉が見つからなかった。

だから――

「とりあえず、飯にしよう」

そんな言葉しか出てこなかった。



『女は怖い』——そんな場違いな事をハンは思っていた。

陽も落ち、空に星がちらほらと見え始めた頃。

夕食のために入った酒場は、にぎやかと言うにはニュアンスの違う喧騒けんそうに包まれていた。

「……なあ」

ハンは相席している青年に声をかけた。

「……あ？」

声をかけられた青年は、面倒くさそうにハンに答えた。

年齢は二十代前半といったところか。気怠けだるい雰囲気けんぎの青年だ。

よく見れば、それなりに整った顔をしているのだが……とにかく覇気がない。世間一般的に言われる若者らしきなど皆無だ。

黒い髪はやや伸び気味で、瞳の色も黒い。体格は細身で、明らかに鍛えているとは言い難い。

アサト・タチバナ——それが、この青年の名だ。

あらゆる意味で、ハンとは対照的な青年である。

「止めなくていいのか？」

と訊たずねるハンに対し、

「どつちを？」

とアサトが『面倒事は御免だ』という顔で訊きき返す。

「どちらかと言えば、お前の相方だ」

「同意見だが、あんたの連れも同じだろう」

「……………」

「……………」

ハンとアサトが酒場の中央に視線をやる。彼等が、あえて視界に入れないように努力していた光景が、そこには展開されていた。

二人のうら若い娘が、酔っ払いであろう男達数名を相手に、乱闘らんとうをしている。

一人は白髪のショートカット。凜とした表情で、スカートでないのをいい事に、派手な回し蹴りを決めている。

言うまでもない。ハンハンのチームメイトであるリン・ユズキだ。

複数の相手に対し、一人ずつ確実に、そして正確に、急所は外し、昏倒させていく。体重を乗せた正拳突きと、風を切るような蹴りを次々に披露する。

もう一人は黒いロングヘア。鋭く繰り出した掌底を相手に叩き込みつつ、背後から襲い掛かってきた男をひよいと投げ捨てる。次に、無謀にも正面からナイフを突き出そうとした男の手首を軽く捻り、関節を極める。薄っすらと微笑を浮かべたままなのが怖い。

こちらはハルカ・クスノセ。

アサトの連れだ。

タイプは違うが、どちらの娘も相当な器量好しなのは間違いない。それだけに、状況はより異様に映る。

その周辺には、すでに気を失っている男達が死屍累々と転がっている。いや、あくまで気絶しているだけだが……。

状況はリンとハルカが圧倒している。放っておいても直に片が付くだろう。

そう結論付けて、ハンとアサトは食事を再開した。現実逃避も甚だしいが、人間には出来る事と出来ない事がある。酒場の主人だろう男が、涙目になってこちらを見ているのは無視した。

事の発端はなんという事のない、酔っ払いの絡み酒だ。女連れだった事が災いしたのか、たまたま彼等の機嫌が悪かったのか——恐らくは両方だろう。始めは丁寧な誘いを断っていたリンとハルカだったが、気が付いた時にはご覧の有様だった。

ハンとアサトが再び酒場の中央に目を向けた時には、乱闘は終了していた。こちらに歩いてくる——まったくの無傷で——二人の娘を見つつ、

「……正当防衛だよな？」

「……過剰防衛だろう」

ハンの引きつったセリフに、アサトは嘆息しつつ答えた。

騒ぎが大きくならないうちに、食事の代金だけを置いて、逃げるように酒場を立ち去ったのは言うまでもない。



「——で？ 結局、何なんだ？」

酒場から喫茶店風の落ち行いた店に場所を移すと、アサト・タチバナは訊ねた。

「仕事の依頼だ」

「仕事、ね」

ハンの答えに、アサトはやはり面倒くさそうに反応した。

アサトはゾイド乗りだ。ただし、軍人でもなければ、ハン達のような傭兵でもない——『なんでも屋』である。本来であれば『依頼人』であるハンに対し、ぞんざいな態度など許されない。

「はいはい。そういう事でしたらお話を伺いしましょう」

場を取り持つように、長い黒髪の娘が言った。

ハルカ・クスノセ。

アサトが所属する〈クスノセ機獣派遣事務所〉の所長である。

先ほど乱闘騒ぎを起こした張本人の一人であるにも関わらず、普段と変わらぬ微笑を浮かべている。黒い瞳はとろんとしており、場を緩るませる雰囲気発散させている。

年齢は二十代半ばだが、不思議と少女のような幼い仕草が似合う娘である。

「護衛から運び屋、盗賊の討伐まで、何でもお引き受けしますよ？」

「ハルカ、やるのは俺だぞ」

「承認するのはわたしです」

「……ま、いいけどな」

アサトとハルカのやり取りが一段落するのを待って、ハンは口を開いた。

「依頼内容は模擬戦の仮想敵だ。アプレッサ今、新型ゾイドの稼働テストをやってる」

ハンがテーブルに置いた資料を矯めつた眇めつすがするアサトとハルカ。

「レイジウルフ……オオカミ型か。デュアル・ツイン・ライフルにEシールド・ブレ

ード。新型の特殊システム——」

「強そうですねえ」

ゾイド乗りのアサトはスペックに興味を示し、門外漢のハルカはデザインから感じた印象を口にした。

「パイロットは？」

アサトの問いに、「彼女だ」とハンは隣の席に座っていた娘を示した。

「あの……リン・ユズキです。よろしくお願いします」

ハルカとは対照的に、先ほどの乱闘騒ぎを起こした事を反省していたらしい。根が真面目なのだろう。

アサトは改めてリンの容姿を確認した。

年齢は二十歳そこそこ。脱色でもしているのか、東方大陸の人間には珍しい白髪を、耳が隠れる程度のショートカットにしている。瞳の色は茶色。

女性としては長身で、スレンダーな体型と凛とした表情から、一見すると少年のように

も見える。

「アサト・タチバナだ……まあ、よろしく」

「ハルカ・クスノセです。リンさんは何か格闘技をされているんですか？」

先ほどの乱闘でのリンの動きを見れば、ハルカでなくとも気付いただろう。明らかに素人の動きではなかった。

「シニューティング・アーツって言うんです。マイナーなんで知られていませんけど、より

実戦を意識した、撃ち出す事を重視した格闘術なんです。クスノセさんののは——」

「ハルカで構いませんよ」

「あ、じゃあ……ハルカさんののは、特に『型』っていうのがないみたいでしたけど」

「わたしのは護身術ですよ。知人に教わった、ちょっとした嗜み程度です」

謙遜なのか本心なのか、ハルカの鉄壁の微笑からは判断に困るだろう。

「ともかく、だ」

話を元に戻すべく、アサトはコーヒーに砂糖を入れつつ、言った。

「俺は〈ヤミヒメ〉で、その〈レイジウルフ〉と戦えばいいんだな？」

「そういう事だ。さっそくで悪いが、明日から頼む」

ハンの返事に追従するように、リンも頭を下げた。真面目だけでなく、素直な性格でもあるのだろうとアサトは受け取った。

「……判った、受けよう。いいな、ハルカ？」

「ええ、もちろん。ゾイドが必要な仕事であれば何でも引き受けるのが〈クスノセ機獣派遣事務所〉ですから」

どう見ても切れ者には見えないのほほんとした笑みを浮かべ、ハルカは事務所のモットーを口にした。



未だに時折、夢に見る。

炎に包まれる村。いくつもの悲鳴。

それらを生み出す戦闘機械獣——ゾイドの一群。

彼等の目的は村の蹂躪だった。

そんな事に、どんな意味があったのかは判らない。

追い詰められた者達に特有の、やぶれかぶれの行為だったのかもしれない。

小さな村だったから自警団にゾイドはなく、村人達はただ逃げ惑うしかなかった。

ゾイドを使った一方的な暴挙。

年老いた者や男は殺され、女は陵辱りようじやくされた後、やはり殺された。村の中央の広場。そこに集められたのは数十人の子供達だった。そこには幼かったリンの姿もあった。髪は長く、綺麗な黒だ。

子供達を囲むように五人の男達が銃を手に、立っている。

やがて一体のステゴサウルス型の大型ゾイド〈ゴルドス〉が子供達の前に現れ、コクピットから男が降りた。彼は言う。

「――俺達は慈悲深い」

何の前置きもなく、当たり前のように言うように。

「だから、チャンスをやろ――逃げてみる」

淡々と。子供達を見ているようで、実際は何も見えていない虚ろな目をしていた。

「ゲームだ。十秒数える。その間に逃げてみる。一人くらいなら生き延びられるかもしれないぞ？」

男が何を言っているのか、子供達は判らなかつた。理解は出来るが、それが何を意味するのかは、恐怖で一杯の頭では処理出来なかつた。

どうすべきかも考えられず、幼いリンは、ただ膝ひざを抱えて震えている事しか出来なかつた。

「ひとつ、ふたつ、みつつ――」

男が数を数え始めた。すでに『ゲーム』は始まっているらしい。

だが、子供達は誰一人として動けなかつた。

「よつつ、いつつ――どうした？ もう五秒しかないぞ」

底冷えするような無感情な声に、彼が本気である事に気付く。すでに正気ではない事も。

「う、あ……………わああああああああああああああああああああああ――ツ!？」

誰かが叫び声を上げたのをきっかけに、クモの子を散らすように、子供達は逃げ出した。

四方八方に。生き残るべく。

「むつつ、ななつ、やつつ――」

男が右手を上げた。子供達を囲んでいた男達が銃を構えた。

子供達の恐怖が頂点に達する。

つまずく少年に手を貸す者はいなかつた。

泣き叫ぶ少女を励ます者はいなかつた。

誰もが我先にと、逃げる事に必死だった。

「このつ、とう——撃て」

男が右手を下ろした。

発砲音と悲鳴の二重奏が始まった。

リンは動けなかった。ただ怖くて、耳をふさぎ、目を閉じ、この悪夢が終わる事を願った。

やがて銃撃が止む。

恐る恐る目を開けたリンの世界は真つ赤に染まっていた。数十人はいた子供達が骸となり、あちこちに転がっている。

即死だった者もいれば、まだ息がある者もいる。痛みにも出ず、呻く者。這いずるように、まだその場から逃げようとする者。

それらを一人ずつ、確実に、無慈悲に止めを刺していく男達。

その惨状はさながら地獄絵図だった。

「ん？ まだ生きてるのがいたか」

『ゲーム』を宣言した男が、リンを見て言った。

「なるほど、他の奴らを盾にして生き残ったか。賢明だ」

(……盾？ 何を言ってるの?)

リンはただ怖くて蹲っていただけだ。

だが、それが功を奏したのも事実だ。男達は遠くに逃げた者から殺していった。その場を動かなかったリンに弾が当たらなかつたのは、彼等が壁に——盾になっていたからだ。

もちろん、リンにそんなつもりはなかつたが。

「しかし、俺は逃げろと言った——これはルール違反だな。違うか？」

男が腰から拳銃を引き抜き、リンの額に銃口を突きつけた。

「ルールを破った者には 罰 が必要だ。違うか？」

——殺される。

そう理解出来た時には、恐怖で思考が働かなかつた。

だから、ただ祈った——助けて、と。

その祈りが通じたのか、銃声は鳴らず、代わりに何かが地面に落ちた音が聴こえた。

それは銃を握っている腕だった。

「……………あ？」

声を発したのは男だった。見れば、男の腕は肘から先がなくなっていた。

地面に落ちたのは拳銃を握っていた男の腕だ。

「な——」

『何が』と言っ間もなく、男はリンにもたれかかるように倒れ、遅れて首が地面に落ちた。

リンは驚く以前に、何が起きたのかさえ判らなかつた。

ただ、死んだのは自分ではなく、男の方だった。

「——伏せて、じっとしている」

新たな声がリンの耳に届いた。死んだ男のものではない、若い男の声だ。

怒りを押し殺し、感情を冷静に保とうと努力しているのが、声音から判る。

そこにいたのは二十歳そこそこの青年だった。いつの間に現れたのか、『カタナ』と呼ばれる武器を手をしている。

彼はカタナを鞘さやに収めると、姿勢を低くし、銃を持っている男達に向かって駆けた。銃を撃たせる暇を与えず、自分の間合いに入った青年はカタナを鞘から抜き、男の一人を袈裟けさ斬りにした。

それが『抜刀術』という技だと、リンは後に知る事になる。

次々に村を荒らした男達を斬り捨てていく青年の動きは美しかった。動作の一つ一つが『流れ』になっていて、無駄がない。相当な使い手だと、素人のリンでも判る。

命令を出していた男を含め、六人が倒されたのは、一瞬だった。

だが、まだ事態は終わっていない。仲間の異変に気付いたゾイド乗りと、その愛機が姿を現した。

全高四メートルほどのサンリ型の小型ゾイド〈ガイサック〉だ。すでに旧式化して久しい機体だが、それでも生身の人間にとっては脅威だ。普通の人間が立ち向かえる相手ではない。

しかし、青年は慌てる事なくカタナを仕舞うと——

「来い——〈クラウエ〉！」

腕時計の様な端末に向けて、彼は言った。

——グウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

金属質な獣の咆哮と共に、漆黒のゾイドが現れた。全高十メートル以上の、見た事のないティラノサウルス型ゾイドだ。

建物の陰で待機していたのだろう。脚部に装備したスラスタを噴かせ、速度を落とす事なく〈ガイサック〉に突進した。

吹き飛ばされた〈ガイサック〉は燃え続ける民家に激突し、その瓦礫に埋まり、動かな



くなった。

それを確認すると、〈クラウエ〉と呼ばれた漆黒のゾイドはリンの方に向き直ると、腹部の装甲を開き、奥にあるコクピットを露にした。まるで彼女を招き入れるかのように。

だが、招かれたのはリンではなく、自分呼んだ青年の方だった。

「立てるか？」

コクピットを開いた漆黒のゾイドを背に、カタナを持って現れ、瞬く間に男達を倒した青年がリンに手を差し伸べた。

「あ……」

何を問われたのか判らなかった。

状況に理解が追いつかなかった。

「俺の言ってる事が判るか？」

青年はゆっくりと、リンを安心させるように続けた。

「俺はハン・カミジョウ。助けに来た。遅くなってすまない」

ハンと名乗った青年はそう言うと、何も答えられずにいた少女を抱きかかえ、漆黒のゾイドのコクピットに乗り込んだ。

そこでようやく、リンは彼が助けに来てくれたのだと理解した。

その後、戦闘はすぐに終了した。

〈クラウエ〉という愛称で呼ばれた機体——厳密に言えばこの時点での正式名称は〈ジェノザウラー改〉なのだが——後に〈ジェノクラウエ〉と呼ばれる事になる、たった一体のゾイドの活躍で。

後に〈ユガ村の悲劇〉と呼ばれる事となる事件。

村は焼け落ち、結局——助かったのはリンだけだった。



「——ッ!？」

唐突にリンの意識は覚醒した。心臓は早鐘を打ち、肌には薄っすらと汗が浮かんでいる。

「……………また、あの時の夢」

それはリンの幼い頃の話だ。かつて、自分の村を襲った惨劇の記憶だ。

荒い呼吸を落ちつけながら周囲を見渡す。まだ夜の闇が濃く、月明かりが窓から差し込んでいる。

「駄目だな、私……」

明日の（レイジウルフ）のテストは模擬戦だ。今日——厳密には日付が変わっているが——ハンに紹介されたゾイド乗り、アサト・タチバナは強い。傭兵ではないが、ゾイド乗りとしての評価は高い。むしろ、傭兵でもないゾイド乗りで名が売れているのが奇跡に近い。戦争が終結したとはいえ、やはりゾイド乗りの仕事は戦闘だからだ。

彼は共にいた女性——ハルカ・クスノセが立ち上げた（クスノセ機獣派遣事務所）に所属する『なんでも屋』だという。戦争が終わった世界では、彼等のように融通の利く肩書きの方が有利になるのかもしれない。

「……寝ないと。こんなじゃ、ちゃんと戦えない」

シーツを被り、視界をふさぐ、まぶた 瞼も閉じて、気持ちを落ち着けようと自分に言い聞かせる。

「私は強くなるんだ。強くならないと駄目なんだ……」



アサト・タチバナと、彼の上司であるハルカ・クスノセに仕事の依頼をした翌日。

ハン・カミジヨウはガイロス帝国軍・第二開発局の談話室にいた。

「どうだった？」

自販機で買った缶コーヒーを、封を開けるでもなく、もてあそ 弄びつつ、ハンは訊ねた。

「悪くない。あれだけ強力な武装を積んでるにもかかわらず、オオカミ型特有の汎用性を保ってるんだからな」

ハンの方に答えたのは件の『なんでも屋』の青年——アサトだ。同じく自販機で買った缶コーヒーの成分表を眺めつつ答えた。

ハンがアサトの方を向いているのだが、アサトは彼と視線を合わせようとしない。

アサトは続ける。

「だが、それだけだ。それなりに手を加えれば、既存のオオカミ型ゾイドで事足りる。新規開発するだけの必要性は感じなかったが？」

「……………」

アサトの問いにハンは無言。無視しているというより、話していいか決めかねている——そんな表情だ。

一時間前。アサトは愛機である（コマンドウルフ）——通称（ヤミヒメ）で、リンの乗る（レイジウルフ）と実機で模擬戦を行った。結果は例によって、機能停止による（レイジウルフ）の不戦敗。

「戦争は終わった。どうして今、新型ゾイドなんぞを開発する？ もう『次の戦争』の準備か？」

アサトの皮肉めいた言葉は、一つの真理でもあった。

今は終戦直後で、どの国も復興に全力を注いでいる。しかし、情勢が落ち着けば状況は変わる。国土防衛のために軍備は拡張され、いずれその矛先は外敵——他国に向けられる。

ヒトは争いをやめられない。文明の発達を人間の進化とするなら、それを促進してきたのは間違いなく戦争だからだ。

「よくやるよ、まったく……」

自分の言葉に嫌気が差したのか、アサトは語尾を濁した。

そこへ——

「相変わらずの人間不信だね——アサト君？」

涼やかな声と共に現れたのは、長い金髪と碧く澄んだ瞳の娘だった。

ロゼット・コダール。

年齢は三十一歳だが、その容姿は少女のように可憐で、柔らかい雰囲気を持つ。こう見えて凄腕のメカニックであり、自らの名を冠したL. C. ファクトリーという工房の主任でもある。彼女の『Kamishiro』という称号を聞けば、技術者の類であれば、思わずその場に膝を突く事だろう。

「ロゼット、来てたのか？」

「うん。私の仕事は終わったけど、気になっちゃって」

ハンが声をかけると、金髪碧眼の娘——ロゼットはそう答えた。

「あんたも〈レイジウルフ〉の開発に携わってたのか？ ……というか、『アサト君』はやめてくれ」

「ふふ、ごめんなさい。でも年下だし、なんとなく——ね？」

「ま、別にいいけどな」

この手のタイプには何を言っても無駄だ。取り引きをする材料も持ち合わせていない。だから、アサトは本意ながら、話題を元に戻す。

ロゼットが言うには、彼女は〈レイジウルフ〉の基本設計と基礎フレームの開発を行い、そこから先は別のチームが行っているそうだ。そして、〈レイジ・システム〉という副産物を得たとも言った。

どういう事だとアサトが問うと、

「〈レイジウルフ〉は東方大陸に生息している希少なオオカミ型野生体でね、その中でも群れのリーダーである特に強い個体のゾイドコアを使ってるの。〈レイジ・システム〉は

…何て言えば伝わりやすいかな——そう、言わば固有スキルなんだ。〈コマンドウルフ〉乗りのアサト君は知ってるよね？ 〈ラグナレク・ファンク〉——あれに近いかな」

とロゼットは答えた。得意分野のためか、非常に饒舌だ。

ちなみに、彼女の言う〈ラグナレク・ファンク〉とは、経験を積んだ一部の〈コマンドウルフ〉にのみ発現する特殊能力だ。ゾイドコアを瞬間的に活性化させ、能力を強化する。しかし、ゾイドコアに対する負担も大きく、軽々しく使えるものではない。

「〈レイジ・システム〉はそれを機械的に再現したもの。もちろんゾイドコアに対する負担は皆無じゃないけど、それを最低限に抑えて、システムとして安定して使えるようにしたんだ。——あ、ちなみに〈レイジ・システム〉と機体のマッチング作業をしたのは私ね」  
「なるほど。〈レイジ・システム〉については判った。だが、俺が訊いてるのは『どうして今、必要なのか？』だ」

その問いにも彼女は淀みのない口調で答えた。

ロゼット曰く、『戦後の戦闘』は『局地戦による小規模なもの』がメインになるらしい。そうになると『数』より、一体あたりのゾイドの戦力——つまり『質』が求められる。〈レイジウルフ〉の基になったオオカミ型野生体のゾイドコアを調べるうちに、〈レイジ・システム〉の構想を得た彼女は、それを従来のゾイドに転用出来ないかと考えた。制限時間付き、更にシステムと機体の相性の問題があるとはいえ、一体のゾイドの性能が〈レイジ・システム〉を搭載するだけで向上する。

これは頭の固い軍上層部や政治家にも魅力的な宣伝文句だったそうだ。  
かくして、〈レイジウルフ〉の開発にゴー・サインが出された。

そうロゼットは語った。

「そういう事か。つまり〈レイジウルフ〉は〈レイジ・システム〉ありきの機体だど？」  
アサトの問いにロゼットは首を縦に振った。

「判っただろう？ 〈レイジウルフ〉の真価は〈レイジ・システム〉にある。リンがそれを使いこなせない事には話にならない」

部外者のアサトに話していいものかとも思ったが、守秘義務がある以上、無闇に口外はしないだろう。溜息を吐きながらハンは缶コーヒーを開け、喉を潤した。

それを見たロゼットも自販機にコインを入れ、少し迷った末にミルクティーを選んだ。

「今、話した〈レイジ・システム〉の事は他言無用だよ」

そう言いつつ、ミルクティーの缶を開けるロゼット。

アサトもそれに倣い、缶コーヒーに口を付けた。ちなみにハンの選んだのはブラック。アサトのは甘めのブレンドだ。

全員が飲み物を飲んだため、場が沈黙する。

そして――

「……やっぱり七年前の事件のせいなのかな」

ロゼットがぼつりと呟いたのを、アサトは聞き逃さなかった。

「何の話だ？」

「アサト君も知ってるよね？ 〈ユガ村の悲劇〉。リンはその唯一の生き残りなんだ」

東方大陸に住む二十代以上の人間にとっては記憶に新しい事件だ。世情に疎いアサトでも、当時の報道で、その凄惨さは知っている。ハンがその当事者である事も。

「……そういう事か」

何かに思い至ったようなアサトに向けて、ハンが問う。

「タチバナ、何か判ったのか？」

「――強迫観念だよ」

「なんだと？」

「あんたは、なんでゾイド乗りになろうと思った？」

「？」

アサトの質問の意図が判らず、ハンの頭に疑問符が浮かぶ。

「まあ、あんたの事はどうでもいい。俺は偶然だ。他になりたいものもなかったしな」

ハンは黙って続きを促した。

「ユズキの場合は強くなりたかったっていう願望より、強くならなきゃいけないっていう義務感があるんじゃないか？ 自分が助けられたから、自分も誰かを助けられるようになりたい――みたいなな」

それはあるかもしれないとハンは思った。

「だが、根底には事件の恐怖が強く残ってる。ゾイドに乗る度たびに、当時の事を思い出してしまう。だとしたら、ユズキはゾイド乗りには向いてない。ゾイドは搭乗者の感情に敏感だからな」

「〈レイジウルフ〉のフリーズ現象も、それが原因かもしれないね。怖がっているリンに対する拒絶反応か……」

ロゼットにも思うところはあったのだろう。口調が重たい。

「〈レイジウルフ〉を完成させたいなら、ユズキは降ろすべきだな。だいたい、ゾイド乗りなんて嫌々なるもんじゃない」

アサトの言う事はもつともだ。しかし、それでいいのだろうかとハン考える。

「俺はどうすればいい。リンに何を言ってやればいいんだ」

ロゼットは何も言わない。それは自分の役目ではない——そんな風にハンを見つめた。  
「ま——そこは専門家に任せよう。いいカウンセラーが、ユズキの所に行っているはずだ」



### 第二試験場格納庫。

人気のない キャットウォーク 通路で、リンは手すりに身を預けて、愛機を見上げていた。

「ねえ、〈レイジウルフ〉。あなたは私を拒絶してるの？」

物言わぬ漆黒の戦闘機械獣は反応しない。

「ごめん。訊かれても答えられないよね」

そう言つて苦笑する。

「……………あなたの声が聞けたらいいのにね」

そんな益体やくたいもない願望が口を衝いて出てしまう。相当、まいつているのかもしれない。

そこへ——

「——聞けますよ」

突然の少女の声に、リンは驚いて周囲に意識を向けた。

十五、六歳くらいの少女が、手を伸ばせば届く距離にいた。

「初めまして。カスミ・シノザキといいます」

小柄な少女だ。艶やかな灰色アッシュ・ブロンドがかつた銀髪を肩口で揃えている。瞳の色も同じく灰色が

かつた黒。いつそ美少女と呼んでも差し支えない綺麗な少女だ。これで愛嬌があれば完璧

だが、そういうのは苦手らしい事が雰囲気で判る。

あまり社交的な少女ではないのだろう。

「〈レイジウルフ〉というのは、その子ですか？」

「そうだけど……」

カスミの問いに、リンはやや、うろたえつつ答えた。

突然の少女の来訪に、リンはただ困惑していた。そうしていると、カスミと名乗った少

女は〈レイジウルフ〉に手が触れる距離まで近づくと、その機体を見上げた。

「……………」

リンは無言でそれを見ている事しか出来ない。

やがてカスミの瞳が閉じられ、華奢な手が〈レイジウルフ〉の装甲に触れる。

数秒もそうしていただろうか。リンはその光景に神秘的なものを感じた。

「——この子は望んでいます。貴女あなたの想いに応えたいと」

「え……？」

リンは困惑した。この少女は何を言っているのだろうか、と。

「貴女の力になりたいと。〈レイジウルフ〉はそう言っています」

聞いた事がある。ゾイドと心を通わせる事が出来る人間——俗に〈感応者かんのうしや〉と呼ばれる人間が、ごく稀まれに存在すると。

「あなたは……」

『〈感応者〉なの？』という言葉は続かなかった。今、訊きくべきなのはそんな事ではない。

「〈レイジウルフ〉の心が判るの？」

カスミは頷うなずいた。

「なら教えて——どうしてこの子は私を受け入れてくれないの!？」

操縦性は比較的高い〈レイジウルフ〉だが、本当の意味でこの機体の性能を引き出すには、ゾイドと心を通わす素質と高い身体能力、操縦技術が必要である。

通常時の操縦は問題ない。なのに、〈レイジ・システム〉を起動させると、機体が停止してしまう。それは〈レイジウルフ〉のリンに対する拒絶の意思表示ではないのか？

「〈レイジウルフ〉は貴女を拒絶していません」

「——っ!」

では、なぜ？ 原因は何だ？

しかし、リンの胸中など気付いていないように少女は続けた。

「ゾイドはヒトを感じます。乗り手の想いを素直に、その性能に反映します。特に不信や不安には敏感です」

「……………」

「貴女の不安の理由は——何ですか？」



「どうでした、カスミちゃん？」

ハルカは開口一番に、モニター室に来た少女に言った。

アッシュ・フロンド  
灰色がかった銀髪を肩口で切りそろえた、伶俐れいりで、周囲を寄せ付けない雰囲気けいふきの少女だ。  
カスミ・シノザキ。

〈クスノセ機獣派遣事務所〉の三人目のメンバーである。

「……上手く伝えられませんでした」

それは普段のカスミには珍しい、悔しげな声音に聞こえた。

彼女は他人とコミュニケーションを取るのが苦手だ。他者と関わる事に恐怖心がある。

ゾイドを通してしか、他社と心を通わせる事が出来ない。不器用な少女。

だが――

「大丈夫ですよ。リンさんには伝わっています。だから、もう一度〈レイジウルフ〉に乗る事を決めたのでしよう」

ハルカの言葉に、俯うつむいていたカスミは顔を上げた。

「そうでしょうか？」

「ええ、きっと」



リンが〈レイジウルフ〉のコクピットに乗り込もうとしたその時、彼女を呼び止める声が聞こえた。

振り返るとハンがいた。その表情は複雑そうな面持ちで、普段のどこかのんびりとした穏やかさがなかった。

「どうしたの、ハン？」

〈レイジウルフ〉のテストを始めてから、彼がこんな風に、出撃前に声をかけてきたのは初めてだ。

「……たまに考える事がある。お前は、俺を恨んでいるんじゃないかと」

独白ともとれるハンの言葉に、リンは目を丸くした。

「どうして私がハンを恨むの……？」

「七年前の事件の責任は俺達、傭兵にある。お前を引き取ったのも、罪の意識があつたらだ」

〈ユガ村の悲劇〉。

ただ一人の生き残り。

「なのに、俺はお前をゾイド乗りにした。お前の村を滅茶苦茶にした人間と同じにしようとしている」

ゾイド乗りになる。それはこの世界で最も強い力を手にするという事。

「けど、俺は他に術すべを知らない。傭兵をやるしか能のない男だ。ゾイドの事以外、何も教えてやれない」



だから戦う。奪うためでも、護るためでもなく、生きるために。

「俺は——」

「私は！」

ハンの言葉を遮り、リンは叫ぶように言った。

「私はハンに助けてもらって感謝してる！ だから、一緒にいられて、同じゾイド乗りになれて、すごく嬉しいの！ 恨んでる訳ないよ！ なのに……ハンは馬鹿だよ！」

ぽろぽろと涙を流しながら、震えた声で、リンは言葉を紡いだ。

「そんな事考えて、苦しんで……馬鹿みたいだよ。私はハンみたいに、誰かを助けられる人間になりたいの！ だから強くなりたいの！ シューティング・アーツだって、ゾイドの操縦だって、そのために覚えたんだよ!？」

そうだ。目の前にいる彼のように。

「だから、自分を否定しないで。ハンは私の目標なんだから」

そこで、はたと気付いた。

強くなりたかった理由。

それは誰かを護るための力が欲しかったからだ。七年前の自分を救ってくれたハンのように。心神喪失状態だった自分を支えてくれた仲間達のように。

そんなシンプルな理由だったのに、いつの間にか忘れていた。目的と手段がごっちゃになっっていた。

強くなりたかった訳じゃない。

ゾイド乗りになりたかった訳じゃない。

ただ、大切なものを護れる人間になりたかったのだ。



「リン……」

涙を浮かべるリンの顔が、七年前に助けた少女と重なった。

もう七年も経ったのかと場違いな事をハンは思った。

「……そうか」

妹のような子を泣かせてしまったという罪悪感と、自分の罪が許されたような安堵感で、ハンの胸が一杯になる。

「悪い。つまらない事を言ったな」

「……そうだよ。ハンは過保護すぎるよ」

文字どおり泣き笑いの顔でリンは答えた。

「―ねえ、ハン」

「なんだ？」

「ちよつとだけ、甘えてもいい？」

「それは……」

「お願い。今だけでいいから……駄目？」

不安そうな表情をするリンに、再び罪悪感がこみ上げる。今、自分に出来る事は何だ？それは多分、彼女を安心させてやる事だけだ。だったら――

「これでいいか？」

「……うん」

リンの華奢きゃしゃな身体を、そつと抱きしめる。彼女を引き取った頃は、ハンの師であるフアルナや、姉代わりだったロゼットが、よくこうしていた。彼女等がいない時は、ハンがそうする事もあった。リンが成長し、精神的にも落ち着きを取り戻していくに従い、この方法をとる事もなくなっていたが。

「なんか、懐かしいな。七年前も、こんな風に抱いてくれたよね」

「……誤解を招く発言はやめてくれ」

ハンが少しだけうろたえる。それはもちろん、ユガ村の悲劇の際に駆けつけた時の事なのだが。

「あはは、そうだね。でも、誰も聞いてないよ」

リンが屈託なく表情を崩す。彼女の笑顔を久々に見た気がした。自分もリンも、無意識に気が張っていたのだろう。

しばし、無言の時間が流れる。

この七年、近くで成長を見守っていたために、リンに対しては妹のように思っていた節がある。だが、彼女ももう二十一だ。いつまでも子供ではない。そう考えると、複雑な心境になる。

「兄貴の心境ってのは、こんな感じなのかね。妹の成長が嬉しくもあり、さびしくもある」

「それ、娘に対するお父さんの心境じゃない？」

ハンの発言に、リンが少しだけジトつとした目を向ける。

「でも、そっか……ハンは私が大人になるのがさびしいんだね」

「ちよつと思っただけだ。いつまでも兄貴役は御免だしな」

「……それって、兄貴じゃ嫌って意味？」

照れ隠しのつもりの発言に、思わぬカウンターが入った。

「――？」

だが、ハンはリンの言葉の意図を理解していない。

「……なんでもない。お兄ちゃんぼくねんじんの朴念仁」

『お兄ちゃん』を強調して、少しだけむくれるリン。

当然、ハンはその理由も判らない。

「それより――（レイジウルフ）のテストが終わったら、頼みたい事があるの」

そろそろテストの開始時刻だ。リンは気持ちを切り替えるように、普段の調子に戻って

言った。

「判った。だったら、成功させてみる」

リンの言葉にハンは了承の意を返す。

「約束だよ。じゃあ、行ってくる」

「ああ、行ってこい」

ハン言葉に、リンは右手の親指を立ててみせる事で応える。

彼女はもう大丈夫だろう。

いつまでも、無力な少女ではないのだから。



（レイジウルフ）のコクピットに搭乗し、リンはゾイドコアを起動させる。次々とシステムが立ち上がり、機体の起動準備が整っていく。

そのシークエンスを眺めつつ、先ほどのハンとの会話で思い出した事を整理する。

恐れていたのは力を持つ事。

強くなりたいと願いつつ、力を持つ事が怖かった。

初めて拳銃を向けられた時の恐怖は、今も忘れられない。

力はヒトを傷つける。力はヒトを不幸にする。

リンはそんな風に思っていた。

けど違う。力は使うヒト次第だ。

誰かを助ける事だって出来る。

そのために力が欲しい――誰かを護れるように。

「だから、お願い――（レイジウルフ）……応えて！」

『――その願い、聞き届けましょう』

声が聴こえた。直接、心に語りかけてくるような、優しい響き。

「……………え？」

そして、気付けば風景が一変していた。先ほどまで〈レイジウルフ〉のкокピットにいたはずなのに。

そこはいわゆる庭園だった。石畳の道があり、池があり、石灯籠いしとうろうがある。そして何より目を惹くのは――

「綺麗でしょう？ 牡丹ぼたんっていうんですよ」

リンが振り返ると、そこには一人の娘が立っていた。

年齢はリンと同じくらいだろう。二十代前半といった感じだが、微笑むその表情からは余裕と風格が感じられる。髪の色はリンと同じで白いが、彼女とは対照的に長く、『姫カクト』と呼ばれる東方大陸特有のヘアスタイルだ。その長い白髪を赤い布でまとめている。瞳の色は金色で、気を抜くと惹き込まれそうになる。

その身にまとう衣装も独特だ。強いて言うなら神社で働く『巫女』のものに似ているが、紅白ではなく、白黒。

この空間のせいもあるが、全体的に『和』という言葉が似合う娘だとリンは思った。

「惑星・地球の原産の植物でね、こんな赤い花を咲かせるんです」

娘はそう言うと、手近な牡丹の木から花を摘み、リンの髪に刺した。

「――うん、やっぱりあなたに似合うわ。リン」

名前を呼ばれてどきりとした。同時に確信も持てた。

そう、この娘をリンは知っている。

「レイジウルフ…………？」

「はい。初めまして――というのも変かしら？」

そう言って、〈レイジウルフ〉の化身の娘は微笑んだ。



野生体の頃は――戦闘機械獣になる前は、『彼女』は群れを率いるリーダーだった。

『彼女』の判断で群れは動き、『彼女』の決断が群れを生かしてきた。

生きる事は選択と決断の繰り返しだ。

だが、『彼女』のそれは他者よりも重かった。

『彼女』の判断ミスが、群れをヒトに捕獲され、機獣化される原因となった。

それが悔しかった。  
群れの仲間達を護れなかった自分が情けなかった。  
だから――



ゾイドの記憶装置には『空き領域』と呼ばれるスペースがある。そこに形成される『仮想空間』では、ゾイドがヒトの姿を採り、搭乗者の精神とコミュニケーションをとる事が出来る。

これにはヒトとゾイド、双方の承諾が必要になる。互いを認め、心を開く。そんな当たり前で難しい信頼関係が。

(怖がっていたのは私も同じね……)

〈レイジウルフ〉の『仮想人格』――今、リンがいる『仮想空間』に形成されている対人インターフェイスは、優しい気持ちで一杯だった。

(リンに自分の姿を重ねて、それがもどかしくて、だから少し……ほんの少しだけ拗ねてしまったのかもしれない)

しかし――

(リンには私が必要で、私にもリンが必要なよね)

まだ自分に出来る事がある。

必要とされている。

それが嬉しかった。何より、自分と同じように大切なものを護れなかったリンに、共感に近いものを感じた。彼女を助きたい。力になってやりたい。

不思議とそんな気持ちにさせられる。

(どうして、こんなにも惹かれるのかしら？ 本当に不思議なヒトね)

そこへ――

「ねえ、レイジウルフ？」

「はい、何ですか？」

思考を中断させられた事など気にも留めず、〈レイジウルフ〉の対人インターフェイスは、にこやかに答えた。

「……ごめんなささ」

「――はい？」

突然の謝罪の言葉に、レイジウルフは笑顔のまま固まった。何を謝られているのか判ら



「——うん！」

その言葉に迷いはなかった。

だから——

「判りました。一緒に護っていきましょう」

一度は護れなかった。けど、リンと一緒になら護れる気がした。

「あなたの護りたいものを、私にも護らせてください」

もう一度だけ、護らせてほしい。護れるものが欲しい。

「お願いします——我が主よ」

頭こうべを垂れ、服従の意を示す。

しかし——

「駄目だよ、そんなの」

リンの口から出たのは否定の言葉で……。

「……そうですか。やはり私にはそんな資格が——」

「あ——ち、違うの！ そうじゃなくて……」

「？」

「私と一緒に護ってくれるんでしょ？ だったら私は主とかじゃなくて——『相棒』だよ。

レイジウルフっていうのも味気ないよね。——そうだ、この姿の時は『レイ』って呼ぶね？

いいかな？」

絶句というのは、こういう状態を言うのだろう——そんな事を考えながら、レイという

名をもらった娘は頭を上げ、視線の高さをリンと同じ位置に合わせた。彼女の瞳はまっす

ぐに「こちらを見つめている。

（私は、何をこんなに気負っていたのだろう）

まったくもって損な性格だ——そんな風に自分を笑う。

そして——

「ねえ——リン」

「なに——レイ」

「うふふ。良い響き……とても良い名前を戴きました。ありがとうございます」

「よかった、気に入ってもらえて」

そしてレイが本題を切り出す。

「強くなろうとする事は大事な事。でもね、『どうして強くなりたいのか』——それを常に忘れないで。目的のない力は暴力以下です。『強くなりたい』という想いは、ふとした瞬間に裏返ってしまう。力を持ったヒト……いえ、私達ゾイドも同じです。リンが強くな





のだろう。

「うん。始めて!」

テンションの高いリンに少しだけ戸惑っていたようだが、ハンは何も言わず通信を切り、模擬戦開始のアナウンスが流れた。

対戦相手であるアサト・タチバナのコマンドウルフ・タイプ——〈ヤミヒメ〉は動きを見せない。〈レイジウルフ〉のテストなのだから、積極的に攻勢に出ないのは当然だろう。

「やるよ、〈レイジウルフ〉—— 〈レイジ・システム〉 起動!」

〈レイジウルフ〉の各所に備え付けられた マグネッサー M コンデンサー C スラスタ T ユニットが展開し、

テール・ユニット

尻尾部分に備わった冷却フィンが開いていく。そして、展開されたパーツの隙間から赤い粒子があふれ出し、機体全体を包み込んでいく。

真紅のオオカミ——まばゆいばかりの発光現象を起こしている〈レイジウルフ〉はそう呼ぶ事しか出来ない。

オフエンス・モードへの移行に成功したのだ。

「やった!」

両前脚に装備したEシールド・ブレードが二枚になり、色も機体と同じ赤いきらめきを放つ。

「一八〇秒しかない。一気に決めるよ!」

真紅に輝く〈レイジウルフ〉が駆ける。

先手必勝。

出し惜しみはしない。出来る相手でもない。

アサトの搭乗する黒い〈コマンドウルフ〉——〈ヤミヒメ〉は、見た目に通常機との差異はない。警戒するのは背部に装備したライフルと、大型の実体剣だろう。

「まずは牽制!」

〈レイジウルフ〉の頭部側面に装備された、二〇ミリ・バルカンが火を噴く。威力は低いが、〈コマンドウルフ〉の装甲は薄い。だから、当然のように〈ヤミヒメ〉は回避行動を取った。

そして間髪を容れずに、本命である背部のデュアル・ツイン・ライフルを起動する。四つの砲門が標的を狙う。

「当たって!」

デュアル・ツイン・ライフルは名称の通り、二連装のライフルに、それぞれ二つの砲門を持つ。実体弾とビームが微妙にスピードを変えて〈ヤミヒメ〉に吸い込まれる。

〈ヤミヒメ〉はこれにEシールドを多重展開する事で対応した。

Eシールドはあらゆる攻撃から身を護る盾だが、徹甲弾のように『貫通』を目的とした弾丸に弱い。Eシールドに結晶薄膜化現象が起こり、『割られてしまう』のだ。

高収束ビームはEシールドに弾かれたが、爆裂徹甲弾はそうはいかない。銃身が焼き付く限界すれすれの連射により、計七層に渡って展開されたEシールドを、第二層まで突破した。

それにより、その場に釘付けになった〈ヤミヒメ〉に、〈レイジウルフ〉はEシールドの刃であるツイン・ブレードで斬りかかる。高出力のエネルギーの刃が〈ヤミヒメ〉のEシールドと激突し、激しい火花が散る。

「このまま押し切るよ——〈レイジウルフ〉！」

リンの呼びかけに応えるように、ツイン・ブレードの出力が更に上昇する。

Eシールドごと〈ヤミヒメ〉を斬り裂かんとばかりに、左右の前脚に装備された真紅の刃を打ちつける。

やがて限界を迎えた〈ヤミヒメ〉のEシールドと、〈レイジウルフ〉のEシールド・ブレードが同時に『割れ』、拮抗状態が崩れた。



「くっ、シールドはもう使えないか——〈カグツチ〉！」

アサトは〈ヤミヒメ〉の<sup>コンディション</sup>状態を確認し、次の行動に移る。

『了解。〈カグツチ〉起動』<sup>インチャライズ</sup>

アサトの要請に従い、〈ヤミヒメ〉に搭載された自律思考型戦闘支援AI『クノキ』が、大振りの実体剣である〈カグツチ〉を使用可能にする。〈ヤミヒメ〉の背部に装備された剣が<sup>アーム</sup>支持腕を介して、展開される。

Eシールドが消える直前に次の行動に移っていたアサトの〈ヤミヒメ〉と違い、〈レイジウルフ〉はまだ機体を立て直せていない。

ならば——

「〈業火炎上〉——」

アサトの言葉に〈カグツチ〉の刃が灼熱化する。武装の<sup>セーフティ</sup>安全装置を解除するため音声入力——<sup>トリガー・ウォイス</sup>激発音声だ。

片翼のように右側面に展開した実体剣である〈カグツチ〉の刃に、熱が宿る。

「吼えろ——〈カグツチ〉！」<sup>ほ</sup>

〈ヤミヒメ〉が〈レイジウルフ〉とすれ違つ。

捉えた——アサトはそう思った。

しかし、手応えがない。

「なんだ!？」

『——後ろです』

〈ヤミヒメ〉に搭載された支援AIであるクノキは、時に自己の判断で行動を起こす。アサトより早く反応したクノキが、ホーミング・レーザーを後方へ発射し、迎撃行動を取った。

いつの間に回りこんだのか、真紅のきらめきを放つ〈レイジウルフ〉が後方にいた。クノキが牽制に放ったホーミング・レーザーを、残像を残して回避し、こちらに向かつて来る。

——速い。

〈ヤミヒメ〉を急旋回させ、二五〇ミリ・ライフルで狙い撃つ——が、当たらない。

『目標が速すぎるため、ロックオン不可能です』

クノキの女声を思わせる機械音声マシン・ヴォイスが告げる。

目で追うのが精一杯だ。その上、残像による攪乱効果かくらんも手伝い、〈レイジウルフ〉を上手く捉えられない。

一撃。二撃。三撃——

再展開した〈レイジウルフ〉のEシールド・ブレードの斬撃を、〈カグツチ〉で受け流す。

四撃。五撃。六撃——

鋭い斬り込みは止まらない。

ただひたすらに、必死に、何かに抗あらがうように打ち込んでくる。

(何がユズキをそうさせる?)

真つ直ぐに、真剣に、機体を通してリンの感情が流れ込んでくる。

(『強くなりたい』——か)

判らなくもない。アサトにも、そういう想いがあった。力があれば護れたかもしれないなかつた過去。

(……けどな)

〈ヤミヒメ〉が構えていた〈カグツチ〉をすつと引いた。猛攻に出ていた〈レイジウルフ〉がバランスを崩す。

無防備になったその横腹を正面に捉え、そして——

「——〈ブラスト〉!」

アクティブイト・ウォイス。  
発動音 声。

同時にEシールドの応用であるエネルギーの力場が発生し、まばゆい青い閃光が（レイジウルフ）を吹き飛ばした。

「時間切れだ」

（レイジウルフ）のオフENSE・モードには制限時間がある。コンデンサーに蓄えたエネルギーを全面開放するため、それを使い切ってしまうと、一時的に機能が低下するのだ。

横倒しになった（レイジウルフ）の機体は、すでに真紅の光の衣を身にまといなかつた。



「まあ……こんなところか」

モニターで（レイジウルフ）と（ヤミヒメ）の模擬戦を見ていたハンは、予想された結果を口にするように言った。

「よかったですか？ （レイジウルフ）は負けてしまいましたよ？」

隣となりでテストを観戦していたハルカが、いつもの微笑を浮かべて言った。

「勝敗を決したのはリンの腕だ。むしろ、タチバナ相手によく善戦した」

負け惜しみではないだろう。その表情は満足げで、どこか誇らしげでもあった。

「このテストの目的は（レイジ・システム）の起動——オフENSE・モードの使用にあります。目的は達したのですから、あとはユズキさん次第という事だと思います」

同じく、同席していたカスミが淡々と言った。

「そういう事だ。リンはまだゾイド乗りとしては未熟だ。だからこそ、これから伸びる。」

（レイジウルフ）の真価はこれから発揮される」

「リンさんと共に成長していく？」

ハルカの問いに「ああ」とハンは答えた。

苦い経験しておくのもいいだろう、とも。



「負けた……？」

『SYSTEM FREEZE』と表示されたモニターを見つめながら、リンは自分が負けたのだと認識した。

だが——不思議と敗北感はない。むしろ達成感の方が大きい。  
〈レイジ・システム〉の起動に成功した。

オフエンス・モードにより得られた、〈レイジウルフ〉との一体感。  
活性化したゾイドコアの鼓動が、まだ感じられる。

これが本当に『ゾイドと一つになる』という事なのだろう。

ゾイドは心で動かすのだと改めて実感した。

「ありがとう、〈レイジウルフ〉」

そして——

「これからもよろしくね——相棒」

——ウオフツ！

倒れていた機体を起こし、〈怒れるオオカミ<sup>レイジウルフ</sup>〉はその名に反して、優しい声を上げた。



それから数時間後、L. C. ファクトリーの執務室にて、ロゼットは録画された〈レイジウルフ〉と〈ヤミヒメ〉の模擬戦の映像を観ていた。リンと〈レイジウルフ〉の事が気になり、様子を見に行っていたのだが、職員に呼ばれ、すぐに自分の工房に戻らざるを得なかったのだ。

L. C. ファクトリー主任——ロゼット・ユダール。

のほほんとしているが、こう見えて彼女は多忙なのだ。

「さすがだね。おめでとう、リン」

画面には、真っ赤に輝く〈レイジウルフ〉の姿が映っている。

「リンには、<sup>ほうび</sup>褒美をあげないと。でも、『エクシード・ドライブ』……これは教えない方がいいよね。出来る事なら——ううん、絶対に使って欲しくないから」

エクシード・ドライブ——〈レイジ・システム〉の本来の力……それは、今はまだ語れない。

『極秘』と記載のある〈レイジ・システム〉の仕様書をめくりながら、ロゼットはモニターに視線を戻す。そこには〈ヤミヒメ〉の放った〈ブラスト〉によって吹き飛ばされる〈レイジウルフ〉の姿が映っていた。

「派手にやられたなあ……。ふふ、アサト君にもプレゼントをしないと。最高に強力で、

最高に使いにくいものがいよね」

そういえば、温めていた近接戦用装備のプランがあつたな——と執務机の引き出しを漁る。それから寝ずに新たな武装の仕様書と設計図を仕上げた事は誰も知らない。ちなみに、その仕様書のタイトルにはこう書かれていた。

『近接戦用特殊乙式斬刀』——と。

## エピソード

リンが〈レイジ・システム〉の起動を成功させてから数日後。

場所はL・C・ファクトリーの格納庫。

そこには、エッジの利いたパーツで構成されたオオカミ型のゾイドの姿があった——〈レイジウルフ〉だ。

今日ここで、機体の最終調整と塗装作業が行われる。

「リン、本当にいいんだな？」

我が事のように訊いてくるのはハンだ。もう何度目になるか、不毛なので、リンは数えるのをやめてしまった。

「もう。ハンもいって言ったじゃない」

「そう言わないであげて。ハンはリンの事が心配で仕方ないんだから」

リンの背後から現れたのは、作業用の白衣を着たロゼットだった。

「あくあ。私もこんな風に誰かに心配して欲しいな」

ロゼットの言わんとしている事に気付き、リンは顔を赤くする。

「なに言ってるんだ？ 俺はロゼットの事も気にかけてるぞ」

不思議そうな表情でハンが言った。リンとは違い、ロゼットの言葉に含みがあった事には気付いていない。

「ふふ。ありがとう、ハン。でも、その朴念仁ぼくねんじんなところは改善の余地があるかな」

なおも頭に疑問符を浮かべるハンを楽しそうに眺め、ロゼットはリンの方を向いて言う。

「ハンじゃないけど——いいんだね、本当に」

「うん。もう決めたから」

答えるリン。

彼等の話題。それは〈レイジ・システム〉の起動に成功したリンが、後日、口にした言葉に起因している。

あの日の出撃前にハンに言った、リンの『頼みたい事』。

それは——『〈レイジウルフ〉の色を白く塗り変えたい』というものだった。

白。

それは今ではリンのイメージ・カラーとなっている。

白い髪は東方大陸では非常に珍しいからだ。

だが、彼女の白髪の原因を知っている者にとっては、気軽に口にするには躊躇ためらわれる色

でもある。元は黒かった色が、恐怖によって抜け落ちた結果だから……。

「今の黒も〈シエノクラウエ〉とおそろいでいいんだけど、私のイメージって白だと思うんだ」

ハンは何を言っているのか、思案顔のまま。ロゼットは優しい笑みを浮かべながら。

それぞれの表情でリンの言葉を聞く。

リンは明るい口調で続ける。

「開き直りとかじゃなくて、ただ、受け入れていこうと思ったんだ。立ち止まったままじや、多分、何も変わらない」

だから――

「だから、〈レイジウルフ〉は白くする。私と一緒に強くなるために。大切なものを護れるように」

そう言って、リンは塗装準備中の〈レイジウルフ〉を見つめた。

そこへ――

「――いいんじゃないか？」

突如聞こえた声の主はハンでも、ロゼットでもなかった。

「あ、ファルナ。間にあったんだね」

「ああ、ようやく一休みだ」

ロゼットが『ファルナ』と呼んだ女性は、やれやれといった口調で答えた。

ファルナ・イカルガ。

ほわっとしたロゼットとは対照的な、抜き身の刃のような近寄り難さを感じさせる女性だ。年齢は三十七歳だが、ロゼットと同じく年齢不詳な感がある美女である。

女性としては長身で、すらっとしたモデル体形。少し癖のある茶色に近い赤毛を、ポニーテールにしている。瞳の色は橙色で、睨んでいる訳ではないのだが、凄味がある。

「さつきから聞いていれば――ハン、お前は過保護すぎる。もうちよっと本人の自主性を尊重しろ」

「……判ったよ」

ハンがファルナの弟子に当たる。もつとも、そうでなくても彼女に意見出来る者など――ロゼットを除けば――そうそう存在しない。

「リン、お前が決めた事なら好きにきなさい。ただ、後悔だけはするな。言葉にした以上は実現してみせなさい」



「うん。ありがとう、ファルナ。ハンも、心配してくれてありがとうね。もちろん、ロゼットも」

自分を支えてくる仲間達に向けて、リンは感謝の言葉を口にした。

過去は変えられない。過去は消せない。

しかし、これから護れるものが——ある。

想いはある。それを叶えるだけの力も得た。

あとは自分次第だ。大切なものを護っていこう。

リンは満面の笑みを浮かべて、仲間達の顔を見回した。

まずは——そう、彼等に追い付く事から始めよう。

そして〈レイジウルフ〉は、リンの要望通り白をメインとしたカラーリングに変更された。その後、マクネッサー・コンデンサー・スラスタ・C・Tユニットのコンデンサー容量の増大にも成功し、三〇〇秒間のオフエンス・モードを可能とした。

〈レイジウルフ〉の真価と、パイロットであるリン・ユズキの物語はこれから始まる——

FIN

## あとがき

どうも、流遠亜沙るとおあさです。

『とある激怒狼の覚醒 - レイジウルフ誕生篇 -』をお届け致します。

この作品は今回の企画で加筆修正をした『紙白作品二部作』では、もったも古い作品です。それだけに、加筆修正をする度に描写が変わり、ページが増えています。『ジェノクラウエ篇』『バニッシュラプター篇』が三十ページほどなのに対し、『レイジウルフ篇』は四十ページ越えです。一応の完結編というか、区切りの話なので色々盛り込みたいと考えた結果です。

この作品は前述の通り、三部作中、一番最初に書いたものです。なので、他の二作と少しだけフォーマットが違います。技術的にも拙つたない部分が多く、読み返す度に少しだけ恥ずかしくなります。今回の加筆修正で、かなりマシになったと自負していますが……いかなものか。まあ、リンの未熟な部分がテーマでもあるので、それとシンクロしていればいいかなと。言い訳ですが。

少しでも内容についても触れさせてください。

この作品の主人公であるリン・ユズキは、紙白さんの中でも『主人公』という位置付けです。僕は処女作でもある『ジェノクラウエ』が好きなので、紙白作品の主人公はハン・カミジヨウという認識が強いです。なので、どうしてもハンを主人公っぽく書いてしまうので、リンを主役に据えて書くのは、気持ちの上で少しだけ難しかったです。これはリンに思い入れがない訳ではなく、主人公はハン、ヒロインは仮想人格達——もしくはロゼットという気持ちが強いためです。

なので、今回はリンを主人公っぽく、かつヒロインっぽくするための描写を追加しました。

ハンの中村悠一ボイスの某・お兄ちゃんキヤラがモデルの一人でもあるので、『お兄ちゃん属性』と、ラブコメ主人公必須スキル『朴念仁ぼくねんじん』を追加しています。

そして、ロゼットは何気に三部作皆勤賞です。ファルナさんは『ジェノクラウエ篇』に電話出演しているので、それも含めるのであれば彼女ですね。

補足すると、エピログ前のロゼットのシーンに登場する『近接戦用特殊乙式斬刀』—

—これは紙白さんに実際に作っていただいた強化装備『ヤタガラス』の事です。今回はこ

れは削除しようかとも思ったのですが、ロゼットのシーンを削るのは嫌なので残しました。興味がある方は『ヤミヒメ式型』で検索してみてください。

他にも色々ありますが、きりがないのでこの辺りで。

そんな訳で、そろそろ謝辞を。

まずは紙白さんに感謝——の前に謝罪を。今回は準備に時間がかかってしまい、チェックをお願いするのがギリギリになってしまい申し訳ありませんでした。その分、以前より良くなったと言っていただけで嬉しいです。企画も折り返し地点を越えたので、あと一歩！紙白さんの力を僕に貸していただきたい！『逆シヤア』の演説っぽく

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。次回は……未定です。一週間後に何が掲載されるかは見てのお楽しみという事で。

2014/09/20 流遠亜沙

感想を書く

『5th anniversary of KAMISHIRO』ページに戻る